

四

月一日、老父と妻と三人で、料亭に出かけた。外で飲むなどといったいいつつ以来だろう。

職場の飲み会はこの一年以上一切やっていない。送別会も二年連続でキャンセルした。今年のそれは自分が送られることになるので、人に頼むことも考えたが、それしきのこと人を煩わすまでもない。自分で予約をし、少々の打ち合わせもした。交渉しながら、自分がスピーチしたり、胴上げされたりしているところが浮かんでくるのは苦笑した。これをまた自分でキャンセルすることになるとは、そのときは夢にも思わなかった。

今年の退職者は珍しくぼく一人だった。何だかコロナの一本釣りにかかったようで、どことなくさびしい気もしないではなかったが、気恥ずかしいセレモニーを回避でき、ほっともした。宴がないからといって惜別が表せないなんてことはまったくない。負け惜しみっぽいけど、今回そのことがよくわかった。

京橋川にせり出すように設えられた八畳敷きに腰を下ろすと窓の向こうの川面に夕日が落ちるところだった。いつもならまだ仕事をしている時間だ。川沿いの道路をひっきりなしに車が通る。昨日まで勤め人同士だったものが、まるでよその土地の日常を眺めているようだ。ガラスをばらまいたように光を散らす川面を

眺めながら、この光景をぼくはずっと忘れずにいるのじゃないかと思つた。

料理はどれもおいしかったし、ちよつと奮発したせいもあり酒もうまかったのだ。九十二才になる父もよく飲んだ。メニューにはないがいい濁り酒が入っている、と言う店員に乗せられて追加すると、

「こらあ、いい酒だ。」
と自分で継ぎ足した。まだ戦後の色濃い勤め始めのころ、母の実家で密造していたどぶろくを職場で振る舞うと、

「これは宮森君が持つてきてごした、ててえらい喜ばれてのう。」

などと初めて聞く話を楽しげにした。
父と酒についての思い出など、母の嘆きを含めてろくでもないものばかりだ。だが、一度家で甘酒をこしらえたとき、それが何がどう発酵したものかアルコールが生じたようで、ちつともうまいとは思えぬそれを父ばかりちびちびと飲んでた。あれは、昔上役を喜ばせた密造酒を思い出してたのか。

飲み会がすべてなくなつたことで、ぼくは父と飲む機会を得た。もしかすると医学的には大罪を犯したのかも知れないのだが、これから濁り酒を口にするたび、上機嫌の父を思い浮かべることになりそうだ。

木幡智恵美

送り迎え (2)

寛大、実歩の送り迎えをし出して一週間、積雪の日も何とか乗り切つた。

その日は、娘が市役所に行く用事があるというので、朝から駆り出される。早朝から忙しかった。義母の身の回りの世話をし、散髪までしたのだ。二年前までは、デイサービスに理髪店が出張散髪に来られ、予約してやつてもらっていたのだが、制度が変わつたのかそういうことができなくなつたとのこと。息子の散髪をスキルでやっているの、「私でよかつたら、やりましょうか」と聞くと、「やつてくれる」と言われる。以来義母の散髪もするようになった。夫まで、「切つてくれる」と言い出し、自分も含めて我が家の散髪は、「パーパーこわた」で行っている。「お母さんの髪も切つてあげたかね」と、はさみを入れてる私に義母が聞く。「いやあ、母は早くに亡くなつたから」と、何度か繰り返された会話をやる。散髪の後片付けを終え、デイサービスの送りは夫に任せ、玉湯に出かけた。

玉湯の家の玄関を入ると、ちょうど授乳中だった。授乳を終え、宗矢も車に乗せ、寛大と実歩を保育所に送る。宗矢を抱いて保育所に入ると、先生たちが寄つてきて、「ああ、寛ちゃんだ」「寛ちゃんにそっくり」と口々に言つた。

その後、市役所へ。「三十分くらいで済むと思う」と娘が言うので、車の中で宗矢と待つ。今のところ眠つてくれている。次の授乳までは大分間があるから、お腹がすいて泣くことはないだろうと思ひながら抱いているが、時の経つのがこんなにも遅いのか。ふと見ると、宗矢の額に汗が浮いている。汗が冷えて風邪でもひかせたら大変。ポケットからハンカチを出して拭いてやる。三十分過ぎても、娘はまだ現れない。目覚めた宗矢をあやしむながら、窓の外を見るが、出てくる人たちは見知らぬ人ばかり。一時間が過ぎ、さらに十分経過し、ようやく娘が車に近づいてきた。帰りに、M医院によつて忠ちゃんの診断書を受け取り、玉湯に帰り、私の役割は終わり。

そうして、週末を迎え、筑前煮、シチュー、サラダを作つて孫たちを迎えた。一日置いた休日は寛大、実歩とパン作り。生地をこねて叩くところからやらせた。宗矢はどんどん膨らんでいく。顔の大きさは実歩と同じくらいになつていく。



30代フリーター やあ、ジイさん。経団連の調査では、企業が新卒採用でいちばん重視するのはコミュニケーション能力だそうだ。

年金生活者 モノより情報をつくる産業が主流となった現在はそうなつてしまう。

では、そのコミュニケーションとは何なのか。吉本隆明は、言葉の根と幹に当たるのは「沈黙」であり、コミュニケーションの過ぎないと言っている（講演「芸術言語論——沈黙から芸術まで」、2008年7月19日）。

「沈黙」とは言葉を発することの否定だ。「沈黙」が言葉の根と幹に当たるとしたら、言葉の本質は「否定」にあると考えなければならぬ。その「否定」を起源にまでさかのぼると、「否定」の対象は言葉の指し示す対象となる。「猫」という言葉は現実のネコを否定するために発せられる。

30代 なぜ否定するんだ。
年金 生まれ落ちたこの世界の現実に耐

「かなり」と言うところを「ちょっと」と言うのは、「かなり」を覆い隠すことを意味する。覆い隠された「かなり」はそのぶん強度を押し量るのが難しくなる。言われた側はそれを最小限に見積もる一方で、最大限にも見積もることを強いられる。一種の「疑心暗鬼」状態に陥り、「ちょっと」が凄みを帯びて感じられるようになる。

それは「沈黙」の凄みと言ってもいい。この場合は全面的な「沈黙」ではないが、「ちょっと」は「かなり」を覆い隠すことによって部分的な「沈黙」を形成していると言ったことができる。これに対して、「かなり」をストレートに言葉にした場合は、その言葉自体によって強度は限定され、「疑心暗鬼」状態にはなりにくい。

「ちょっと」の応用編のような言い方もある。たとえば「少し」の使い方だ。「ちょっと」と違って辞書的には「かなり」という意味はないが、文脈によっては「かなり」とか「だいぶ」という意味を帯びることがある。「少

えがたさを感じるからだ。現実のネコを消し去ることはできない。だから、現実のネコを「猫」という音声あるいは文字に置き換えることによって「否定」する。現実とはつながりのない音と形に置き換えることで現実を消去すると同等に近い効果が得られる。

この置き換えが言葉の枝葉の部分、コミュニケーションの手段としての言葉を形成する。つまり、言葉は何かを伝達するために生まれたのではなく、その何かを否定するために生まれ、その否定のためになされる置き換えが、結果として伝達の機能を持つようになった。吉本はそう言っているように聞こえる。

30代 黙っていても何も伝わらないというのが常識的な考えだろう。
年金 言葉には沈黙があるが、記号にはない。言葉はそれを発しないことも表現になるが、記号はそれを消去すれば何も表さない。記号の一種である信号機の沈黙ということを想定してみる。それは故障か停電か廃止を意味し、もはや記号ではない。記号は沈黙

し静かにしろ」がほとんど「何もするな」という意味になることがあるように。言葉が「沈黙」に支えられていることの証左と言っている。

30代 人間はこの世界の現実を耐えたいと感じ、その現実を否定するために言葉を持ったとジイさんは言った。

を抱えることができない。会話が途絶

えたときの落ち着かなさは、沈黙が表現の停止ではなく、それ自体が表現だということを示す一例だ。

言葉のほらむ沈黙の力は個々の表現でも見ることができる。「ちょっと」という言葉は「少し」とか「わずか」という意味のほかに、その反対に近い「かなり」という意味にも使われる。「それはちょっと困る」というとき「かなり困る」ということを表している。

ただし、そのとき「少し」「わずか」という意味が完全に消し去られるわけではない。「ちょっと」と語るときは「たくさん」を否定すること、「たくさん」と語るのをやめて黙ることを意味する。その沈黙が「かなり」の意味を支える力となる。

30代 なぜそんな理屈に合わないことが起きるんだ。
年金 「かなり」の意味をストレートに言葉にするのを避けることによって、より大きなインパクトを生むことができるからだ。

現実はそのそんなに耐えがたいのか。

年金 人間の胎児は他の哺乳動物にくらべて頭部が大きく、産道を通りにくいので、あまり大きくならない未熟な段階で生まれてくる。未熟なぶんだけこの世界を過酷に感じ、母胎の楽園からの追放としてそれを記憶する。生まれ落ちた世界の現実を否定し、楽園へ帰還することが生涯にわたる願望となる。

それはかなえられることのない願望であり、その代替となるもののひとつが言葉にほかならない。母胎と言葉は普遍性を帯びている点が共通している。胎児にとって母胎は全宇宙だ。それと臍の緒を介して一体化している胎児は自ら宇宙でもある。つまりユニバーサルな、すなわち普遍的な存在ということができる。

言葉は現実と直接つながりのない音声と文字で成り立っている。その意味で現実から切り離されている。現実とは個別的な存在である以上、それから切り離されている言葉は普遍性を帯びざるを得ない。

ニュース日記 780
中村 礼治

沈黙と コミュニケーション